

掌編

さとしの
幽霊

土田清十郎

さとしの幽霊

放課後、さとしの幽霊を見た。二人の友達と、校庭でサッカーをしている時だった。

「おい、あそこにいるの……さとしじゃないか？」

友達の一人が、校庭の隅を指差してそう言った。男の子が、僕たちの方を向いて立っていた。さとしだった。さとしは、小学校指定の体操服を着ていた。僕たちは、急いで校庭の隅に駆け寄った。すると、聡の体がすうっと透明になっていき、やがてそのまま消えてしまった。僕たち三人は、その場に立ち尽くした。

一年以上も行方不明だったさとし。突然僕たちの前に現れて、消えてしまったさとし。

その日の夜、近くの山からさとしの遺体が見つかったという知らせがあった。

校庭に現れたさとしは幽霊だった。さとしの遺体は、地中に埋まって白骨化していたという。警察は、事件と事故の両面から捜査を始めらしかつた。さとしの埋まっていた山は、僕たち小学生の間では、よく遊び場として使われる山だった。その中でも、少し奥に入った、普段は人が足を踏み入れない場所に埋まっていたらしい。そんな近くにさとしがいたなんて。遺体が掘り起こされたとき、久しぶりに外に出たさとしが、幽霊になって校庭に現れたのだろうか……。

当時、さとしと遊んだことはほとんどなかった。さとしはクラスでもおとなしい性格で、放課後は必ず校庭で遊んでいる僕たちを尻目に、さっさと家に帰ってしまっていた。交流がなかったため、僕はさとしがどんな奴だったのか、あまり思い出すことが出来なかった。

その日、母に買い物を頼まれた。お金を渡され、近所の商店街でメモに書かれたものを買ってくるようにと言われた。家を出るとき、母は何度も、車には気をつけなさいと言った。

大きな交差点で、歩行者用の信号が青になるのを待っていると、道路の反対側に、体操服を着た少年がこちらを向いて立っているのが見えた。さとしだった。さとしは僕に、何かを言おうとしていた。そのとき、大きなトラックが道を横切り、さとしの幽霊は消えてしまった。僕は慌てて道路の向こう側を見渡し、さとしを探した。一歩前に足を踏み出すと、けたたましい車のクラクションが聞こえてきた。僕は驚いて、後ろにしりもちをついた。その瞬間、僕の目の前を乗用車がクラクションを鳴らしたまま、猛スピードで走り抜けていった。僕の心臓は大きく脈打っていた。はっ、はっ、と浅い呼吸が吐き出される。車への恐怖心が、足元から全身へと、僕の体に再び蘇ってきた。車には気をつけなさい。母の言葉が思い出された。

僕は以前、車に轢かれたことがあった。遊んでいて道路に飛び出した僕に、スピードを出していた車が突っ込んできた。もちろん、そんな事故があつて軽症で済むはずもなく、僕は意識不明の重体に陥った。二週間後、意識を取り戻した僕の目の前には、涙を流した両親がいた。それから必死にリハビリをして、奇跡的に以前と変わりのない日常生活に戻った今でも、母は何度も車に気をつけるようにと言う。

危うく、もう一度死の淵をさまようところだった。いや、今度こそ死んでいたかもしれない。僕はしりもちをついたまま、呼吸を整えることに専念した。

死――。死とはどういうものだろうか。さとしは白骨になった今でも、幽霊となって現世に出てくる。僕も死んだら幽霊になるのだろうか。ひよっとすると、僕はあの事故のときすでに死んでいて、今ここにいる僕は実は幽霊だった、なんてこともあるかもしれない。道路の向こう側で、さとしの幽霊は何かを言おうとしていた。

「きみも、もう死んでるよ」

僕は頭を振る。僕には足もある。何かに触れることも出来る。先程の車も、僕に対してクラクションを鳴らした。僕は確かに生きている。それは間違いない。くだらない妄想をその場に捨てると、僕は商店街への道を急いだ。

買い物を済ませ、帰り道を歩きながら、僕は事故で負った胸の傷を触ってみた。傷は他にも、体中のあちこちにある。胸の傷に触れていると、再び事故の瞬間が思い出された。

夕方周囲は薄暗く、車のヘッドライトが眩しかったことだけははっきりと覚えている。クラクションの音も、未だに耳に残っている。場所は山沿いの道路だった。交通量もあまりないので、車もスピードを出していたのかもしれない。そこへ、僕が山側から道路へ飛び出した……。

それにしてもなぜ、僕は道路に飛び出したりしたのだろうか。そういえばこれまで、事故の当日を思い出したことはなかった。

その日、僕は一人で遊んでいた。手に何かを持ち、額に汗をかきながら必死に作業をしている光景が、頭に浮かんだ。

――土だ。土を掘っている。でもなぜだろう？僕は必死に当時の記憶を呼び起こす。

――そうだ、いたずらで誰かを驚かそうとしていたんだ。僕は一人で、ひそかに落とし穴を掘っていたんだ。僕の頭の中に、あの日の光景が次第に蘇ってきた。

思ったよりも立派な穴を掘ることができた。木の枝を持ってきて穴の上に乗せる。さらに、その上から枯葉を乗せたら完全に周りとの区別がつかなくなった。周りにも枯葉がたくさん落ちていた。山の中だった。よく子供たちの遊び場になるあの山。みんなに見つからないように、少し奥に入ったところに作った。落とし穴が完成したとき、誰かが近くの道路を歩いているのが、茂みの中から見えた。同じクラスの奴で、学校指定の体操服を着ていた。誰だったかな……。僕は茂みの中からそいつを呼ぶと、いいものを見せてやるからこっちへ来いと、手招きをした。そいつが山の中へ足を踏み入れると、僕は急いで落とし穴の裏側へと回った。自分が落ちないように細心の注意を払った。こっちこっち。僕はここでも手招きをして、そいつを近くに呼び寄せた。僕の目の前には、自慢の落とし穴があった。僕はわくわくしながら、ことの成り行きを見守った。パキパキという音とともに、そいつの姿は消えた。やった、と僕は思った。胸が高揚し、達成感に包まれた。覗いてみると、そいつは穴の底で目を見開いて、顔をこちらに向けていた。怒っているんだと思った。ただ不思議なことに、そいつは何の言葉も発しなかった。呼びかけても何の反応も示さない。僕は次第に怖くなり、走って助けを呼びに行った。いや、ただ単にその場から逃げ出したただけなのかもしれない。山側から道路に飛び出すと、目の前には車のヘッドライト

があった……。

僕の背中を、冷たいものが流れたような気がした。買い物袋を持つ手が震えている。

事故の後二週間、僕は意識不明の重体だった。目が覚めてからは、大変なりハビリ生活が始まった。その日のことは、僕の記憶からはすっかり消えていた。落とし穴に落ちた子は、無事に脱出できただろうか……。いくら僕でも、抜け出せないほど深い穴を掘ったつもりはない。無事に脱出したに決まっている……。

先程の交差点に着くと、道路の反対側に、体操服を着た少年がこちらを向いて立っているのが見えた。今度は手招きをしているように見えた。

おわり